

---

# ぼくはシチュー

光太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくはシチユー

### 【Nコード】

N3402F

### 【作者名】

光太郎

### 【あらすじ】

ぼくはシチユー。とってもおいしいシチユー。だってママさんが、ホワイトソースから丁寧につくってくれたんだもの。シチユーの目から見るとある家庭の一風景。ダーク系です。

ぼくはシチュー。

とってもおいしい、ホワイトシチュー。

そんじょそこらのシチューとは、わけがちがう。ママさんが、小麦粉とバターと牛乳で、一から作ってくれたんだもの。

ママさんは、ちいさなちいさな赤ちゃんを背中におんぶして、ずっとずっと長い間、ぼくのそばにいてくれた。

知ってる？

シチューのもとになる、ホワイトソース。ちょっとでも気を抜くと、ダメになったり焦げたりするんだ。

だからママさんは、ずっとぼくをかき混ぜていてくれた。

おかげでぼくは、とろとろ、とろとろ、真っ白なホワイトシチュー。

赤ちゃんも、ぼくを食べてくれるのかな？

どんな顔して、食べてくれるのかな？

「じょうずにできた」

ママさんがほえんです。

ぼくもうれしい。

ねえ、もうそろそろ、食べごろだよ。はやく食べて、もっとすてきな笑顔をちょうだい。

ぼくはそれが、なによりうれしいんだ。

そのために、生まれてきたんだ。

「パパの好きなシチュー、じょうずにできたよ。今夜はパパはやいていつてたから、みんなで食べようね。パパ、喜んでくれるといいね」

赤ちゃんは背中で眠っていたけど、ママさんはやさしい声でそう

いった。

ぼくは、なんだかわくわくしてきた。

ママさんと、パパさんと、赤ちゃんと。

みんなで、笑って、食卓を囲んで。

ぼくは、そんなしあわせな空気のなかで、食べてもらえるんだ。

ママのポケットで、ぶるぶるとなにかが震えた。

ママさんが、背中の赤ちゃんを気にしながら、小さな声でハイという。

「……え？ そうなの？ ううん、わかった。帰り、気をつけてね」とても沈んだ声。

さっきのママさんとは、ちがうひとみたい。

「パパ、遅くなるって。じゃあ、シチューは、明日の朝にしようね」ちょっと泣きそうな声だった。

ぼくも悲しくなってしまう。

ママさん、いっしょうけんめい作ってくれたのに。楽しみにしてたのに。

ねえ、でも、だいじょうぶ。

朝までじつくりねんねしたほうが、ぼく、きっとおいしくなるよ。いまよりずっとおいしくなるよ。

ねえ、ママさん、だからそんな顔しないで。

ぼく、自信があるんだ。

ぜったいおいしくなってみせるから。

ママさんが、ぼくにふたをする。

ようし、がんばるぞ。

まだ寝るにははやかかったけど、ぼくはおいしくなるために、はやくはやくと目を閉じた。

その夜、ぼくは夢を見た。  
ママさんと、パパさんと、赤ちゃんが、おいしいってぼくを食べ  
てくれる夢。

いっぱい笑顔に包まれて、いっぱい幸せに満たされて、ぼく  
はとろけてしまいそうだった。

ぼく、きつとおいしいよ。

だって、ママさんの愛がね、いっぱいいっぱい入っているんだ。

朝になって、ふたが開けられた。

ぼくをさいしょにのぞきこんだのは、パパさんだった。

つかれた顔のパパさん。ママさんはどうしたんだろう？

ああ、赤ちゃんの泣き声。そっか、赤ちゃんが泣いてるんだね。

パパさんが、コンロのスイッチを入れる。

朝一番で、ぼくのからだに火がとおる。

？ ねえ、待って。

待って、待ってパパさん、どこに行くの？

だめだよ、だめだよ、熱いよ。

熱いよ、ねえ、もっと火を小さくして。ねえ、ちゃんとかき混ぜ  
て。

ああ、ああ、ぼくの真っ白なからだが、茶色くなっていく。

だめ、だめ、どんどん黒くなっていく。

赤ちゃんが泣いている。

赤ちゃんをなだめる、ママさんの声が聞こえる。

遠くから、シャワーの音。

だれもぼくに気づいてくれない。  
だれもこっちに来てくれない。  
だめだ、もう、だめだよ。  
もう、どうにも、ならないよ。

ぼくは、

ぼくはね、

おいしいっていわれたかった。

笑顔を見せて欲しかった。

食べて、欲しかったよ。

ぼくはそれ以上、なにも考えられなくなった。  
遠のく意識の片隅で、ママさんの悲鳴が聞こえたような気がした。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

これはフィクションですが、シチューを焦がしてしまったのは事実です。言葉にならない切なさ、シチューが感じたであろう無念を風化させまいと、短編にしてみました。  
ヤツは大変焦げやすいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3402f/>

---

ぼくはシチュー

2010年10月31日01時37分発行